

Title	印度に於ける禮拜像の形式研究(逸見梅榮著, 東洋文庫發行)
Sub Title	
Author	守屋, 謙二(Moriya, Kenji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.1 (1936. 5) ,p.160- 161
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360500-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

圖半)(松本芳夫)

印度に於ける禮拜像の形式研究

(逸見梅策著
東洋文庫發行)

一般に宗教藝術の美術史的研究が本來如何なる方法に基づいて爲さる可きかに就いては、さまで安易に且つ簡單には片附けられないものがある、嚴密なる學的要求を充たさん爲めには、論者の中に自づから幾多の立場や觀點の相違が生ずることであらう。併し如何なる藝術觀照の場合にあつても、先づ第一に當然踏まなければならぬ基礎的諸階程のあることは明かである。宗教藝術としては就中、教理學の内容的方面からする考察と、圖像學の形式的方面からする考察とは蓋し不可缺的なものと云はねばならぬであらう。

本書の主題とする所は正しくこの後者に屬するもので、著者の所謂形式研究とはかゝる意味を現はすに他ならないと思はれる。又印度に於ける禮拜像といふのは、佛教にあつては佛、菩薩及び明王、波羅門教にあつてはその諸神像のことで、これらをば前者に於ては特に密教の本經と儀軌、後者に於てはプラーナやシルバシャーストラ等を根本資料と仰ぎ、従つて時代的には穆多王朝より波羅王朝に及ぶ約九百年に限定しつゝ、その間に於ける印度美術史發展の諸相の中に痕附けんとするのが本書の目的である。かく著者が比較的後期の發展に限定したことは「穆多像は尊像の形

式を整備したる點に於ては健陀羅及び摩菟羅派の美術に負ふ所多大なるも、美及び理想精神の表現手法に於ては全然古代純印度派の有するものを復興せし派なりと思惟するものなり、」といひ、「波羅像を形式方面より略言せば、印度佛教像の最後に有せし型の完成時の像なり。その型は密教經軌の所説に悉く合致する様式なり、」といへるのがその根本理由である。

その點に就いて論者の中には遽かに首肯し難きものを多々見出すことであらうけれども、經軌や乃至造像の規範書たる工巧明典による圖像學的規定を主とし一般に藝術作品の純粹なる觀照は寧ろ從におく立場にあつてはこのことは當然の歸結であると云へるであらう。茲でこれらの工巧明典中特に著者が「金玉の價值」であるとすものは例の漢譯造像量度經並びに續補である(これは西藏經より工布查布師が反譯し、それに増補を加へたもの、乾隆七年版本となる。尙ほ「國華」第四十編に逸見氏の和譯が連載されてゐる)。従つて本書の敘述の順序も大體に於てこの經典に準據されてゐることは云ふ迄もない。

本論に這入つて第一には像量篇がある。こゝでは初めに印度の度量制に就いて極めて詳細に記述してゐるが、蓋し諸禮拜像を製作するに當りその換量を確定することは先決問題と考へられる爲めである。勿論既に經軌中に殊或はその他の語を以つて像量を示すことがあるが、それはたゞ像の全高を意味するに過ぎなく、面輪と身高との比例を示すといふ意味ではない。かういふ意味の人體の比例即ち換度の記載があるのは佛典中獨り造像量度經あるのみである。例へば佛像は元來十換度であるべき筈なのに、偶々この

經典が極東に於ては乾隆以後に至つて知られたが爲め、それ以前の造建に係る佛像に嚴密なる標度法による身分比率を用ひることなく、その點で甚だルーズな造像が行はれてゐたのである。「宜なる哉、實測より見て北魏並に六朝、降つて唐朝及び我國の古像にして九標度をとる佛像の多きや」と著者は慨歎してゐる。その他十標度の菩薩像、婆羅門教にあつては十標度の神像、次いで九、八、七、六、四、二標度の諸像を逐次説明し、その一々に就いて記載典籍による極めて周到にして明細な身分比率表をも附し、實際造像家の利便に供してゐる。惟ふにこの問題は佛教教理延びては一般に東洋思想からする人體觀照といふ思想的にも且つは美術史的にも頗る深遠なるべき根本の諸契機を藏するものであらうが、勿論本書に於てはたとひその性質上からとは云へこれらの論點には殆ど關説する所がないと云つてよい。この點甚だ遺憾であるが、併し何れにしても特にこの一篇は在來のわが國に於ける印度美術の研究範圍内では前人未到の境地を開拓したものととして注目すべき業績である。第二、像威儀篇では所謂坐住勢の名稱の下に諸像の主として下肢の姿勢を示す様々の形式、並びに座、乘、印契、持物等の問題を取扱ひ、又身色、身光及び光背の意義を闡明し、身莊嚴の題下では衣服、嚴身具その他の微細な點に及んでゐる。更に第三には造像料篇、第四には像供養篇を以つてし、かくしてこの一大著述は完結を告げてゐる。

これらの個々の項目に互る語義、その史的發展並びに實例を叙述するに際し、凡そ必要な漢譯一切藏經や未譯の梵本は勿論のこと、婆羅門教關係の諸典籍からの極めて豊富な文獻的引證が爲

されてゐるばかりでなく、あの龐大な印度美術遺品の寶庫から自由に採擇された無慮二八〇圖に及ぶ具體的説明が完うされてゐる爲め、讀者の理解に資する所極めて大なるものがある。しかもこれらの叙述の中で特に興味深きことは、隨所に印度人の日常茶飯に於ける生活様式に結び付け、その雰圍氣の中から浮き立たせて、この種の宗教的禮拜像にあり勝ちな單なる觀念的抽象的説明に墮することが避けられてゐる爲め、我々は直接に血の通へる藝術的所産に觸れることが出来るといふ點である。このことはわが國の造建に係る密教像の場合では殆ど味達し難い效果であると云つてよい。古くは台密の阿婆縛抄、或は東密の覺禪鈔等により、又は醍醐寺その他に藏せらるゝかの白描として卓越した粉本類により、我々は密教像の圖像學的知識に親しむことを獲、ときには遙かの天上を夢見る魂の高揚を覺ゆることがあるにしても、本質的に何等かの空疎感なきを得ない。由來わが國の佛教美術はエキゾチシズムの産物であるが、その根本的制約は密教像に於て特に著しいことを今更痛感するのである。

本書は著者の序に云へる如く元來「印度に於ける佛教像と一般神像との關係」といふ題下に於ける研究の一成果に過ぎなく、その完璧は更に内容方面からする論述を俟つて始めて期すべきであらうが、併し如上の意味に於て印度美術、一般には東洋美術の研究領域からするも一つの基礎的勞作として近來の快著たることは茲に贅言を費すまでもないのである。(守屋謙二)